Japanese Association for Religious Studies

第六部会

『叡山大師伝』をめぐる諸問題

前川　健一

最古の最澄伝であり、最澄の生涯についての基礎資料の一つである『叡山大師伝』については種々の問題があるが、その中でも大きなものの一つが、作者である「一乗忠」が誰であるのかという問題である。円珍の記述にもとづき仁忠とする従来説に対し、近年では同じく最澄の弟子ではあるものの真忠であるとする説が提出されている。しかし、詳細に検討してみると、仁忠ではなく真忠とする論拠は必ずしも決定的なものとは言えない。

この問題を考える上で、これまで閑却されてきたのは、仁忠が何者かということである。『叡山大師伝』に最澄の弟子として記されている人名と、『天台法華宗年分学生名帳』などの最澄関連資料を対照すると、弘仁六年に止観業で得度した玄慧が仁忠と同一人物である可能性が出てくる。『名帳』によると、玄慧は最澄の弟子の中で最初に大乗戒を受けたと考えられる人物である。一方、仁忠は『叡山大師伝』や光定『伝述一心戒文』などで一貫して「上座」と呼ばれている。大乗戒を受けた先後によって寺内の位次を定めよという最澄の遺誡文を考えれば、大乗戒を最初に受けた玄慧が、「上座」と呼ばれることは当然であり、玄慧が仁忠である可能性は高い。

「一乗忠」のように「一乗」と冠した名は、最澄門下の中でも特に大乗戒と深い関わりのある者に与えられたと考えられており、仁忠が玄慧であるとすれば、大乗戒を最初に受けたのであるから、「一乗忠」の名を与えられている可能性は高い。一方、真忠の場合、そのような大乗戒との関わりを確認することはできない。

「一乗忠」を仁忠に比定することに反対する論拠として、最澄死後の仁忠の行動を挙げるものがある。『伝述一心戒文』によれば、仁忠は、延暦寺座主となった義真を大乗戒の戒和上とすることに反対し、円澄を延暦寺寺主、義真を延暦寺上座とする人事案も承諾しなかったという。これらは、義真に後事を託した最澄の遺志に反するものであり、しかも『叡山大師伝』にはこの最澄の遺志が明記されているのであるから、仁忠が『叡山大師伝』の著者であることは妥当ではない、というのが反対論の骨子である。しかし、上記のように仁忠が玄慧であると考えるなら、仁忠の行動に対する評価はおのづから変わってくる。

日本天台宗で最初に大乗戒を受けたと考えられる仁忠の立場からすると、義真は中国で具足戒を受けており、大乗戒で出家したわけではないので、大乗戒の戒和上としては適当でないことになる。また、同じ理由で義真を「上座」とすることもできない。このことは円澄についてもあてはまる。しかもこれは、先に言及した最澄の遺誡文の趣旨にも合致しており、仁忠が『叡山大師伝』の著者であることを妨げる理由とはならないと思われる。

なお、『伝述一心戒文』によれば、弘仁十四年三月に大乗受

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

戒勅許後、最初の年分度が行われ、度者の勘籍（戸籍の照合）手続きが問題となった際、仁忠は玄蕃寮による勘籍を主張したが、光定は『顕戒論』を引いてこれを批判し、俗別当である伴国道と協力して民部省による勘籍を実現させたという。しかし、これは、あくまでも手続き上の問題であり、仁忠が最澄の遺志を無視したと解するのは行き過ぎであろう。

なお、『叡山大師伝』では、義真・円澄について、わざわざ「興福寺僧義真、大安寺僧円澄」と記している。これは単に事実を記しただけと言えば、そうであるが、他の天台僧についてはこのような書き方をしていないことからすれば、半ば意図的なものを感じさせる。このような義真・円澄に対する態度は、上に見た仁忠の態度と整合的であり、むしろ『叡山大師伝』作者である一乗忠が仁忠（＝玄慧）とする一傍証となると思われる。

神秘思想から超越へ
――即身成仏（時間と空間の超越）の例――

前田　禮子

神秘思想を、ここでは、狭く解釈して、時間や空間は超越できるだろうか、ということに限って考えて見る。時間は、太陽や月・惑星などの運行によって生じ、春夏秋冬、生と死、などの循環をもたらす。さまざまな星辰の組み合わせや周期によって、複雑な生命現象が生じる。組み合わせによって、奇瑞が現れることがあり、それを超越の手段にできるのではないか、と考えたりする。高野山真言宗は、さまざまな時間の体系を取り入れ、吉凶や運用を試みている。『宿曜経』（二十八宿）、『北斗七星護摩秘要法』、『七曜星辰護摩法』、『九曜星』（日曜星、火曜星、計都星、月曜星、木曜星、羅睺星、土曜星、水曜星、金曜星）など。

高野山では、超越の方法として、虚空蔵菩薩（金星）を念じる求聞持即身成仏法というものがある。天体の蝕とからめて行われるようである。結果として、どのような超越が得られたかは、空海を除けば、記録が見当たらない。

空海の説く即身成仏は、身口意という三密の方法などによって得られるという。空海は、即身成仏の過程を、十段階に分類して、『秘密曼荼羅十住心論』ほかを著わしている。幼児の幼稚な心の段階「異生羝羊住心第一」から、魂の解脱によって即身成仏に至る「秘密荘厳住心第十」の段階までが述べられている。しかし、空海自身が第十段階の解脱をへて即身成仏に達したかどうか、それは、不明である。ほかにどんな阿闍梨が即身成仏を得たか、記録には、見当たらないのである。一方、実在であったかどうかわからないが、修験道の、役の行者などは、時間と空間を超越した能力を発揮していた、と伝えられている。高野山では、即身成仏という超越が、具体的には、どんな能力を云うのか、については、示されていないのである。

即身成仏とは、まだ現世で生きているにもかかわらず、成仏している、というのであるが、具体的にはどういうことか。人は、この世に在るときは、時間と空間の中にいる。あの世では、時間と空間の制約を受けない、と云われる。即身成仏というのは、神人合一の心の状態であろうが、能力としては、遠隔のも

NII-Electronic Library Service